

8. 回顧 75年間

私は昭和4年5月15日、熊本の田舎、下益城郡豊福村という所で生を受けた。豊福村は熊本平野の中央部で熊本市と八代市の中間でやや八代寄りに位置し、山まで行くのに約3km、海まで約6km離れている。戦後は町村合併で松橋町となり、今また合併で宇城市になっている。

70年も経てば記憶もやや薄れてきたが、小学校（当時は国民学校といった）時代は家で勉強することなく専ら田んぼや近くの小川で遊んだり、時には山に行って「きのこ」狩りや自生の「びわ」を取りに行ったりして過ごした。そんな農村で育ったためか、尊敬する人物は宮沢賢治で、自分も将来は、雨にも負けず、風にも負けず、いろいろな勉強をしながら米や野菜を作りたいという希望をもっていた。また一方では家から3kmくらい離れたところを通る汽車（列車）を見に行き、轟音と共に近づき一瞬のうちに走り去る列車に驚嘆し、あんな車の運転手になれたらいなと言う思いをもつたこともある。

当時小学校のクラスは男女別クラスになっており、それぞれ50名程度でその中10名程度が中学（今の中学と高校を合わせたような学校）に進学した。私も進学組であったが入学試験直前、ハシカにかかり試験に行けなかった。しかし小学校の先生が中学校の先生へ、この子は何とか入学させてくれと話を持ち込まれ、後日中学の校長、教頭先生の面接で入学することが出来た。このように今日ではあり得ないおおらかな時代であったから今の自分にたどり着くことができたのである。

中学に入ると担任の先生から君の上の兄さんは陸軍士官学校へ進み、下の兄さんは海軍兵学校志望であるから君は陸軍幼年学校へ進んだらどうかと薦められた。当時は戦争中で熊本の中学校は陸士、海兵など軍の学校への進学率の高さが学校の優劣を決める尺度であった。宇土中学から毎年20名くらいの幼年学校受験者がいたが合格は2～3名で、幸か不幸か私は合格者の一員となった。熊本県では済々爨とか熊本中学（今の熊本高校）が、一番合格者が多く毎年各10名程度の合格者を出していた。行き先は広島陸軍幼年学校で、喜び勇んで12時間位の急行列車で広島に向かい入校した。これが私が熊本県外へ出た最初のことであった。思えば、この頃が私の人生で最も楽しかった時の一つであろう。その時はわずか2年半で敗戦となり帰郷するとは夢にも思わなかった。広島市は原爆に見舞われたが自分自身は広島に向かう車中で直接の被爆は免れた。しかし翌朝変わり果てた広島市内を歩いて横切るとき、まだ傷つき生きている多数の人々を見てもどうすることもできなかった。その後とも原爆について良く聞かれることがあったが、あまり話したくない話題である。

幼年学校から帰郷してしばらくは精神的に虚無感に陥りまた身体も、多分放射線被爆のためか、元気が出ずほんやり過ごしていた。しかし、これではいけないと思いつの年の暮れ以前に在籍していた中学校に復帰した。中学に復帰して困ったことは語学で、幼年学校ではロシア語しかやっていなかったのに中学では英語をしなければならないことである。約1年後は高等・専門学校への受験であったが何とか熊本工業専門学校（現熊本大学工学部）へ入学することが出来た。そこで3年間を過ごし卒業となり、両親には早く就職するように言われたが、両親には内緒で九州大学理学部を受験したところ合格したので当時福岡市内にいた兄の家族を頼って福岡市へ来た。昭和25年当時の福岡市は人口40万人位で熊本市と同じくらいの大きさであったが、海が近く、唐津、呼子あたりまで景色も交通の便もよく、大学1年の頃は遊びにふけっていた。そのため年度末に教授に自分の成績のことを尋ねに行ったら24人中18番と言われ、これではいけないと思い勉強に力を入れるようになった。専門学校までは授業だけ受けて特別勉強しなくともトップクラスにおれたが、大学ではそうもいかないということがわかった。

大学3年卒業後はもう軍の学校の気分も抜けて学問の道へ進むべく大学院に進み、教官となった。その後、昭和29年12月26才の折、同郷の人と結婚した。自分では30才くらいになってからと思っていたが、私は7人兄弟の一番下で、母も老い、早く末弟を結婚させて安心したいという意向だったので、親同志が決めた結婚に従った。そして翌年長女が生まれ、生長して長女が4才近くなつた時家族づれでアメリカに留学した。その後次女、三女も生まれ今では大学2年から小学1年にわたる4人の孫に恵まれている。その頃（1960年代初め）の留学は船（氷川丸）で行き、船で帰る旅であったのでアメリカは非常に遠くに感じられた。当時、アメリカは生活レベルが非常に高く憧れの的であった。私の給料も日本での月2万円から20万円になり毎月宝くじが当ったように感じた。そこで直ぐにカナダ製のスチュードベーカーという7000ccの大型乗用車を買い2年間で約50000kmをドライブした。2年間のシアトル（ワシントン州）での生活を終え帰った時のお土産は、まだ日本になかったインスタントコーヒーであった。そして日本の生活水準もその頃から次第に良くなり10数年もしたら、収入の単なるドル換算で言つたらアメリカを追い越すようにと変わっていった。私と同じ頃アメリカへ行って、日本に帰ってもつまらないからと言ってずっと留まつた人も少なくないが、20年位後に会つたら、やはり早めに日本に帰るべきだったと愚痴をこぼしていた。

昭和29年からの39年間は私が最も長く務めた職場であり、この間実に多数の人材と出会い彼ら、彼らの多くは、今でも全国各地で活躍している。大学というのは毎

年毎年新しい出会いもあるが別れもあり複雑な心境になるものである。20年位前に私は次のような歌を卒業生に送ったが、毎年このような気持ちで過ごした。

憶い出を　あまた残して去る子弟らに
謝し　また祈る　行く末の春

九大退官後の九州環境管理協会でのことは、別稿「九環協と共に歩んだ12年」に書き綴った。

終わりに、私が好きで、信じていることわざに、「人間万事塞翁が馬」という言葉があるが、人の世の出来ごとは何が禍となり、何が幸福をもたらすかわからないのである。何ごとにも悲観せずまた楽観もせず余命を生き抜くことにしよう。少年の時憧れた宮沢賢治のような生活も75才にしてやっと実現できるかも知れないのである。